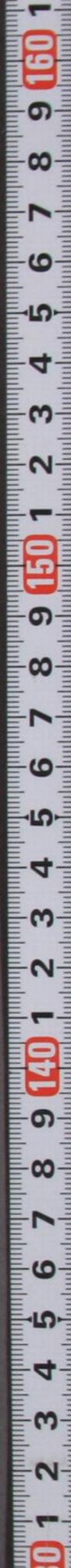
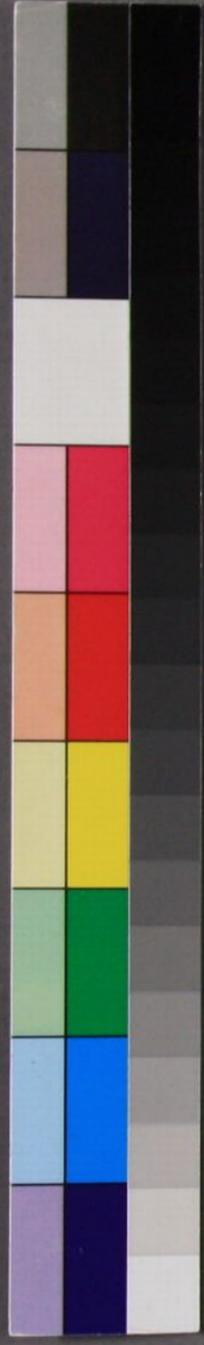
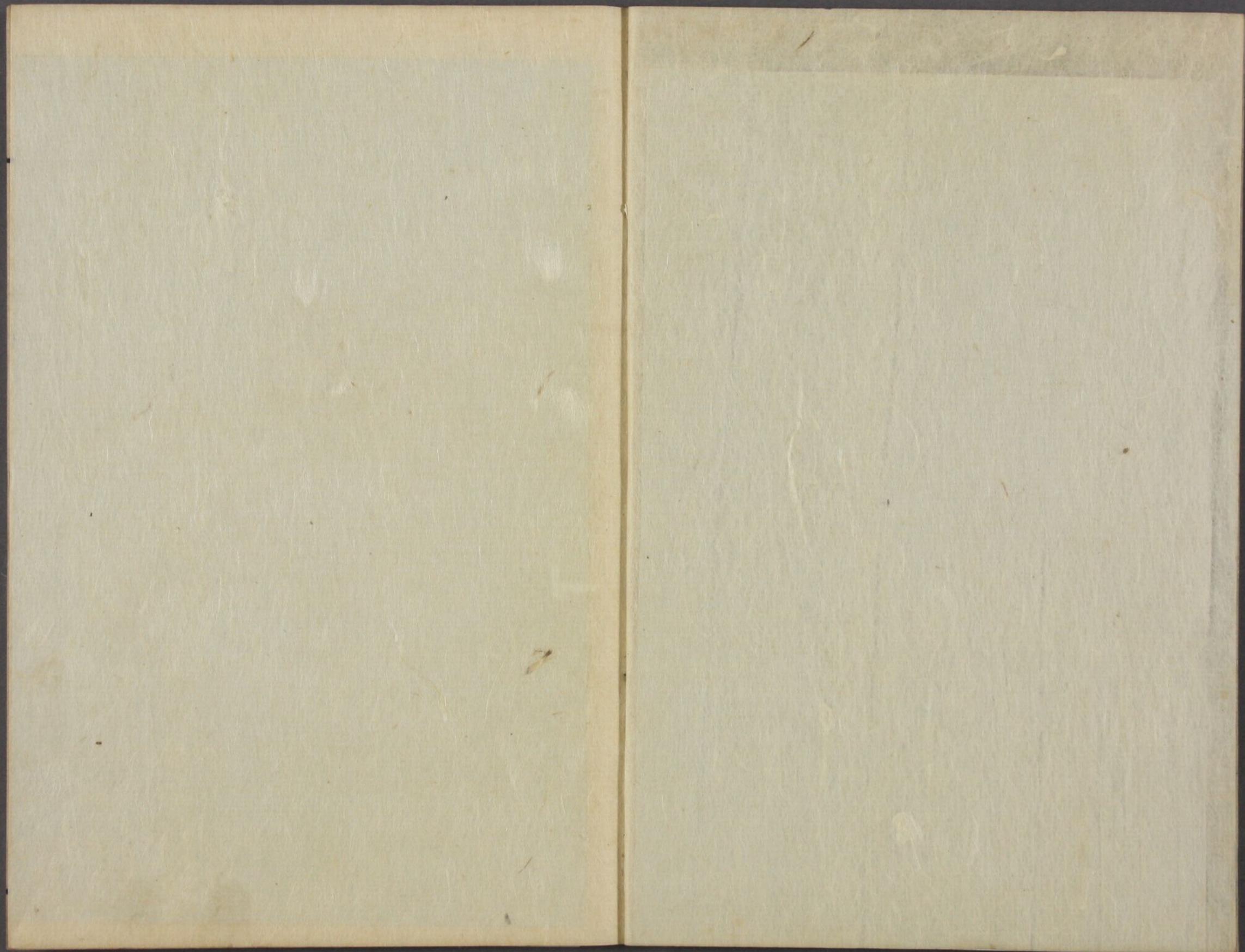


古今集遠鏡

三









冬下チリアウテソノミガ雪ウ曇ルヤウセイ  
 ンテラソビテ道ガ雪ウテ  
 事ル老ガフミヨウテエホド  
 切ハる葉オホキ洞シ影分  
 何ゾ多レのみとけまばのよそづらけ  
 笑を大井よそ  
 ーきる日より  
 きのら色をう  
 けをむも山程毎しておむなるべー

か光のをけ山乃いとよ波よりしてふる  
 勝のおむちよの敷こと  
 ○け大井ノ近取ナ龜ノヲノ山ノ岩子ニソウテオチル  
 勝ノ白玉ノ多イ敷ハ  
 五十年ノ千年ノ敷カヤレ  
 山ノ名艾ニ多イ龜山ナヤ  
 うまをけこのまふのまけ  
 五十年笑とてまつり  
 うま笑風小橋の花のしら  
 てるふ人乃花見とるのこ

かまふ川よえる 藤原無風

あつらふ玉匠月日ハおりりして花見てく  
 うとまぞまきあき

○ナシ正ナレニタビるテイク月日ハ多イヤラスクナイヤラ  
 何正也ハズニウカト  
 シテクラスガ けヤウニ面白イ花ヲ見テクラス春ハサ  
 キツウ日敷ガスクナウ思  
 ハル、 飯村山喜坊もく  
 移きふおろきとて思へ  
 るとおい月  
 をまうりりしてぬを  
 しあがゆとまはじと  
 けハクわつど  
 ちやとやまけみと  
 乃七十け笑の  
 ー海の風  
 風  
 よま〜ひき  
 きのけ〜ゆき  
 ちくまばあふまげ  
 う〜うをねを  
 君がみあはう〜も  
 さん  
 ○まがクレバけ  
 ぬをへマツバニ  
 サク梅ノ花ヲ  
 君ガ千年マ  
 デラオ  
 女ノ





○位ノ江ノ松ヲ秋風がサアトフクトソノ、トオト流ノ春ヲ  
ウチソル

ふらりくはり川旁しらぬし心の本葉も色まらりゆく

○佐保山の本葉モ色々がサツテキタ トホリニバ全クデニモウ [一] け

佐保川ノ旁が又ツタサウナ 。秋云夢時ぬのこやうに音ふる。本葉ハ色づいておちるおちかくとあり。

秋とどく色と加りぬらぬ山そのお葉は風ぞかへけり

○秋ニツテモ本葉ノ色ノカラスト云常盤山チヤニヨツテ け山ニハお葉

ハナイニ ヨソノ山ノお葉ヲ風が吹テおテサ 此トキハ山へ借スワイ

冬

さう名はぬりあく時をみりぬら下風ふもがらりとあ

○け吉池ノアタリヘトコモカモ白イ雪がフツタ時ニハ山ノ風デ麓ハ花がサアワイ

春宮けくまれあつりる時りほわりてよき

典作藤原よるうけおた

さうは喜日け山りいづる日ハくも時あててはべらぬり

○春日律ノは末ノ若系氏ノ中デモ いよき け上モナイお方ノ姫君ノは腹ニ

テキミシナサツタ若系様ナレバ テウドソノ喜日山ノさうウチハレテ

クモル和ノナイヤウニ は行末イツミデモ クモリナウ天下ヲは照シアソハス

デアラウトおじラヒス

古今和歌集卷第八巻

離別奇

歌三十一

五原行年 船信

まがさかきつるばの山乃若おあさきしりしきく今かつりこむ

○今けがらけがらハ糸ヲ立テ別テ因懐必ヘ下ガまままノイバ山ノ若ニハエテア

ル松ノ名ノトホリニソナガけがらけがらヲ待ツトマナナチキニ又カヘツテコウワサテ

よみ人しるは

まがさかきつるばの山乃若おあさきしりしきく今かつりこむ

○船立テ諸ヘユク人ニ一一萩ノ唯テアルけがらけがら秋ノ世けがらけがら今ワカレルガ

オカヘリヲバイツトモウテマナナチソレヤキツウまイコトデアラウ

おささかきつるばの山乃若おあさきしりしきく今かつりこむ

かぎりおきさるの若よまふこがるる人をもろおらけがらけがらむやハ

○今カウ別テ限モナイまままヨリアチラノ世ヘワハハイクチガソレデモ

けがらノ人ノ多ハ世位忘レルモナニモウテ行ウチヤニヨツテ心ノ内ハドコ

マデモイツニヨニツレガツテイクモ同レフヂヤワサ身コソカラニテ今別ル

心ノ内デハおおまチチヲアトヘおおまニテオカウカイ心デハツレガツテイクワ

サテ おままの世いとまま一 船材よら

まのちつるがみらままのまけけまままわらまみ

まのよまま

まのちつるがみらままのまけけまままわらまみ







わいさうして侍る人乃つづる侍うへおかりと  
あつたやうによめる ぬうやぶ

そのおもひもあつた侍のおくも縁ばかりかゝる人よるもあつた

○そが今度ドホドをいへいかにツテモ 拵者が心ハ イツモン  
そが方へカヨウテ コニ侍ッテハ居子バ ヒツキヤウは身が今別レテ  
跡ニ侍ルトモレバカリヂヤ 心ハ別レハセヌ

おはわがよへおかりと侍ふよめる

よみおのむでさる

おきけこけのうさめおとしんぬめさくくつ法う那

○雲ノアチコチへおレテイクヤウニ 今度まいるヲへかテ 別レル悲レサニ

今ハナテニ進ズルは手向ノ麻ノヨミカナヤウニ 拵者ハイロクニ心ヲクダイ  
テサテクノゴリヲレイハ法ニテゴサルカナ おれ云ぬさとしふも乃給  
あどとこまふきりて袋か  
賜るよまぬさぶらうといふこけり

みちちくあへおかりと人ノよきつづる

ほくゆふ

きつちのへきおうさめをあらおも思ひ人よるもあつた

○ハルカニ雲ノイクモへおツテアルアチヲノ御テアラウニ 拵者ハそが  
ヲタエズオウテ居ヤウホドニ 糸ヒヤハハガテルニ 心ハハガテサツヤルナヤ  
人をおうさめをあらおも

どうしてあつたおもつたおんおきつづる

○色コソ物ニシム物ナレ 別レト云コトハ色デモナイニ ドウ云コトデハヤウ  
ニシム物ニシム物ナレ

うひちちりきる人のこころはぬれおのりて身へて糸  
おちりてきて又うつりきる時りよめ

名内躬恒

かへる心ぬれおのりてうひちちりきる時りよめ

○そ松ノ又下ヲツヤル物ニアルカヘル山ト云ハ ヨシイタ人ノカヘルト云名ヂヤ  
ト云々ニツノカヘル山ハ ふふぞか 何ノヤリニツツゾ サウ云山ガ有テモアルカヒハナイ  
アルカヒト云ハ ミ 冬ブリテモ赤ニハ居上ラズニ 又アチカルト云名デコソアレ  
こゝれぬへおのりきる人りよめつらりきる

よきふのこころやうきうき白ゆ乃ゆきるべもつらぬぬおハ

○今カラハヨソニバツカリ オナツカシウモウテ月日ヲタテルデゴザラウカアノ

ハウへ集ツテは目ニカ、ラレウモハレヌワガ身ナバサ ヲキテス  
とつらぬぬ白ゆ乃ゆきるべもつらぬぬおハ

おとほはら乃ちちりきる人そりよめつらりきる

おとほはら乃ちちりきる人そりよめつらりきる

○けオトハ山ノヨイ木ノ上テアレ物ガウ鳴キス 熟モアノトホリ鳴テキ

松ノ別テナガリヲシウモウデアラウサウヤエル 挿者ドモ、月レコサ  
唐物ニテノ役ニ係付ラレテ西風へ  
ゆぢらりちちりきる物につくひおぬが月のけ

こむつとつこおまかりなむうへのそのことごとくさけよ  
うびつとつぞふよめ。 あらうらうらうらむら

も海ももあつてそ先よきうとくも秋のまきハ情くやあわぬ  
○トモぐニ鳴テドウゾオトメヤセキリぐスヨ 今秋ノ別レノ時分ニオ

ワカレヤスハ コレホドナリヲレイニ ソチハナゴリヲシウハナイカイ  
平のそむき

秋も情もそふま出さくこの時をほとぬ思ひぬこしや海もむ  
○アノ音ノ立ヤウニキ極モ共ニ立テ出テイカキツテハ別レヤヒタナラ ワシハ今  
カラハアノ音ノハヌヤウニ心ガレズニイツモオツカレウモテタテルデゴザラウカイ  
ほろろねがはくへゆめむじとゆりきりあや

おれそこの道きとまゐるそつ海もしてしるめる  
とつらめ

いのらぶふんうかまお抱あつばけり別れはくねーのうらし

○命サへんマカセニツテ死スニ居ラル、抱ナラ ナニガサテハ別レヤスガコレホドニ  
悲もラウゾイ 人ノ命ハハ帰リノ時分ニテクモ知ヌニヨツテサ 悲レイワイノ

おれより神もび乃もむすであつらふんやうら  
てつらがつておしてこの道をみるふくある  
みまをむきま

人やまはさねくねらふんうらいきうしとつてつらあむ  
○人ノサセル旅デハナイ、旅んカライク旅ヂヤニ 多イガイナナラ モウイ







○ソノヤウニ別レヲ悟ニテ擲者ヲ依体切ニ思ウテ下サレトハ今日ニテ羨ニモ感ゼ  
ナシダ サウシタキ後ノ依志ヲニダ感ゼナシダウチニ 擲者が身ハサ け秋ノ  
時取ノフルト云ヤウニ舊ウナツテモウラチノアカ又物ニナリニシタ マソツトホウ  
若イウチニ 依志ヲ知ツタラ 別レテ大ニゴサラウニア、感念ナ

如縁ニ好おやきみりしとておごりしを  
さうらふおふらめる みつ

こころはどくはくくもまうこよひよりきこぬふれをよほし  
○由ふレヤスハナゴリヲレウハアレド サテクニア感レイコカチ ナゼニトヤスニ  
今ノ衆ヨリサキイダ由近付ニナラナシダウチハ 何ヲオナツカレウハ思ヒニセ  
ウゾ 今衆始メテ由近付ニナリニシタレバコソ 依別レヤスナレ スレヤ別レノナゴ

リヲレウ思レヤウニ由近付ニナツタカ ナボウカ感レイコチヤワサテ

おろしらば うみくしらば

つらむしをみりし神はくくもまうこよひよりきこぬふれをよほし  
○ノコリマウテ別レル神ノ後ハトニト玉ヤウニ感ルガ け玉ヲバソモトノ形  
見チヤトぬビテ即チ け神ニツニシテサ 集ル

くはにやく思ふ後おそむらぬる 神をかくかく かくむ日やでふ

○け別レヲナボウカ悲レウセウテ けウニ泣、後ニヒツタリト 又タけ神ハ又感ラ  
且ニテハ乾キハスニイ ナゼニト云ニ コレホドニ悲レウセウチヤニツツテイツニデモ忘レ  
ラニイホトニイツヲ限ト云コトモナウ泣テヌラステアラウニヨツテサ

かきくししはくハゆくぬきききぬききせてきびくわむ

○此喜ぬハトモフルホドナラバ一ツクラニナツテ一ツトツヨウツツカヨイ  
ソレタラけぬライヒタテニレテ ぶレテイク君ヲトメウニ

あはれゆく人をささるひ極花のつづらにささくはぢやとち地

○ナボトメテモトニズニヒテぶレテイク人ヲトメウニ 極花ヨ 道ノヒレ又  
ヤウニチリウツデドガさぞヤトアスノ迷ウテユカホドチツクレイ

あがれぶこえおていーおれもやまをいおひひる人乃

あはれをささるふよきる けくゆき

むらぶちとつげらめいづら乃井れわくでも人よあさあさ

○お神けヤウナ山ノヒミツハ 儀イ他チヤニヨツテ飲ウトモウテス人バチ手  
カラ落ルホドチキニ濁ルニヨツテ せやウニスクウテノヒレ又飲ヌラヌ物チヤガ

テウトも遊リニサテくニアおりまニア人ニぶレタツカナ

ささあつりう人乃くさあおをいひつきてあうとく

ささあつりう人乃くさあおをいひつきてあうとく

下は常乃みちかかひづらさもあはれもささあつりう

○常ヲスルニウレロヘアテタテハ 端ノ方ガあさへワカレルレハ 前ヘマハレテ

ムスブ取テハ又イキアウ他チヤガ ち遊リニ今ライク道ハカウ別ニワカ

レテイク氏 又ソノウチドウレテナリ氏 出合ウワサテ

古今和歌集卷第九 巻鏡

羈旅奇

わつじしき月夜にてよきる安倍仲麻呂

夫の系ゆりしきえんれが喜日ゆるみうさね心より出し月かこ

○今カウ元ヲツトハルカニ足候せばアレク海ノ文ノ月ガテタ アハ

アノ月ハ 旅々ノ三笠山へ出タ月テアラウカイニア

此方ハむろしむまろをむ海にうむ地あうりーお  
ほろーしきりゆめあやまのたうー波へうえかつりまう  
でこさうりまう波此まらり又つりひまうらういさうらう  
ふらびくーはうでまねびとてやうとまふせいと

といきまらたうみべりてかのむた人うぬれもねむけ  
ーきりよまふたうりて月のいとあやうくはーお  
こきり波にてよりまらむむくうとほくあ  
おきねふおねがうれうあお船おのこてあうつし系ね  
系人のりまうつりーら 小野もかむくの船カ  
こくは系ハナ崎うけてこねぬと人うハはまよ海士の船毎  
○コサキハイクラ花ナク候ニアミタアル嶋くヲるテイスキ海上へ今出  
船シタト云ヲ旅々ノ人ニヒラヒテクレイ コレノアキ入海ツテイクアノ船毎ヨ  
船材結るた説と候ー  
ねしーらざ  
よみびとまら

みやこ出てくふみうは系いづも川く風きくもかかせや  
○今日京ヲ出てはミカノ系へキテアノ向ヒニエル山ハ兼背山チヤガ  
川ノ川ガキツウモイニアノカセ山ヨ オレニキルモノヲ借セ山  
。多岐云ニのちしひうき兼背のまららとの  
しうけり。澤ハミチチウなり。

はのぐもつうは浦乃船音り 鳴ぐらとゆく船きりぞあ  
○夜ノウキトアテクル時ガニ 海上カラ見レバ アノ向ナ明石ノ浦ガ船音  
テカクレテ見エヤウニナツテイクアノケレキヲ ぎウヨソニテテイク け船  
中ノ心ハサテモく心ホソイ地ガナレイフチヤ

けちハつる人のいもくかきたれどの人まはら  
此ちハ打園おまるといふぐく今昔物伝ふおせ皇つれちち

のちもるぞよゆりかき但しぬるまで海を船が走てよめると  
あふ下句をんは湯とておしつてふいつ相し今昔物伝本  
はまはまふおしり。船材田の句の流もつう。もてく流ぐらとこ  
いふは流よく解ゆる人あり。流ぐらとこハ海をへてくる船の  
からきてるぬをいつりおしと流もつうは。此ちあてハ船音  
ふうらしてぬるの浦の足ぬを海の沖よりいつし。  
流ぐらとこゆりかきとこふをわくは船音にぬるの浦のからとゆく  
をみてゆく船とくおまじ。は船むりく人若まらり。

あつちうへ友とくる人むらりゆらとつておひてい  
きらとこはハ橋といふさゆあつてまらりゆらとこの川  
のちちりふつていおりわくちちりゆらと見て木の陰か

おきおてかきつたてふりつりの中へおきおけりしふもあ  
て様の心をよむむしれあ。 在る業あ、船也

かく衣きつておきおけりしはけしつらばをきくきゆる様をいざおけり

○一 きつて 船々ニナジニダ妻ガアレバ 別トテハルゴトも又ハ様ガサコ、

ロボツウ地ガナレウセハル、

むしりぬゆとふりつらあの中へおけりしふもあ、さみざ川  
のちりふりつりてみやこにいとあつたおぢりつ控ば  
いづ川のはらうおおとあてあひやきばくぢりおくとあつ  
もきおけりしあつたおぢりおとあつたおぢりおとあつた  
いづやあつたおぢりおとあつたおぢりおとあつたおぢりおとあつた

らむしとあつたおぢりおとあつたおぢりおとあつたおぢりおとあつた  
おぢりおとあつたおぢりおとあつたおぢりおとあつたおぢりおとあつた  
ありき川乃ほらりおぢりおとあつたおぢりおとあつたおぢりおとあつた  
おぢりおとあつたおぢりおとあつたおぢりおとあつたおぢりおとあつた  
おぢりおとあつたおぢりおとあつたおぢりおとあつたおぢりおとあつた

あつたおぢりおとあつたおぢりおとあつたおぢりおとあつたおぢりおとあつた

○都トエテヲ名ニツイテ居ルナラ、 定テ京ノヲヨウ知テ居ルデアラウホ

ドニドレヤモントハウ都鳥ヨ コチガ思ウ人ハ あつた アテ井ルカド あつた ウチヤ

顔とつらげ ともくーらげ

まゝへゆくるぞおぢりおとあつたおぢりおとあつたおぢりおとあつたおぢりおとあつた



かしの木へまるときさ時さうしとせらるる

みつ縁

花びらまきふくも川あそびさうしつゝまの花あけさうさび縁め

○けゴロハ夜がきサニまハおがフツテアルライク夜カもまおララウハ子  
ハラウハ子 聖ノまヲ松ニシテモウハヤ何夜モノ子タ

ふぢもまおのゆへまかりきさ時ふゆさこの浦といふ所  
ありて夕暮とほつといひさうふとさふさうさうさうさ

よみうさほつてふよさる 養家かひさき

夕ぼくよおやつらねき成まうげあささうさうさわきてるをえめ

○三 けニ見ノ浦ノチキヲ見タイ物ヂヤガ コヨヒハ雷月夜デ一が教がウス

ケバハツキリトハエヌニ 夜が明テカラサ トクト見ヤウ

こささうはみさうささふかふまかりさうさあ方の川  
とつさう海の川のをさうにおさめてけきおどのとき  
おついでふみそのつひまうさうさわあはうさうさ  
いさうといふをさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
くさるる あさつらねさうさうさうさうさ

○け方ドモハ今日ハ一日狩ヲシテアルイテ コハク天川ノ川系ヘキタワイ

日モクシタニサテヨイ系ヘキタ 天川ナレヤタナダニ宿ヲカラウ  
みさけあささうさうさうさうさうさうさうさうさうさ

そとふゆりてよせり まのつるつね

一とせふ一ふびきまきん君まてバヤぢかき人もつじきぞあふ

○イヤク天川デハ一年ニ度ヅいぬササル産屋ト云ハ方ヲ待ツチャ

ニヨツテナカク外ノ者が宿カラウト云々上モ借入モアルニトサるズル

朱雀院のちうふあふー海ーうめふも向山ふ

てらるる ながらうくねんた

此ふびきぬさきもそとへむも向山お紫の縁神のまふく

○けなノ縁ハ湯儀ユエヌサモ用言と縁サナダソレユエ神ノはふカ

セニトあぢテ昂チハ山ノお紫ノ錦ヲソノミ、手向ニスル

素性法師

くむきりハつてこの被もきるべきお紫にあふ神やうをさむ

○神へノ手向ニハ 出取ノ身モはツリノ袖ナリ氏切りキザデ麻ニシテ手

向ルハズナレドモ けヤウニん事ナお紫ノ綿ヲハラツパイ足テはをナ

サル、神ナバ けヤウナキタナイツリノ切レナドハぬ文ケハナサルマイ

は返レナサルデカナコサラウ ソレユエサレヒカヘテ手向マセヌ

右方お紫糸を足十を後

物名

うぐひさ

友系、うぐひさのお片





さうとぬれぬ とうとのさ

折葉をうらむるもの説くをぐう

みうしせはうののぼるうぐいすを味をうらむるものさうとぬれぬ

○吉野ノ遊ヘウキゲル水ノ沫ヲ人ハ玉ガ出テキエルト見ルデアアラウカ

やまがきの木 よしんこらげ

横井子秋云ふ柿はちひさしくむらさき色なる柿をてきぬ柿也てきぬ柿

濃柿とて名を柿をいふ又材は木柿といふもよし

秋はまきぬ今やまがきはまきぬぐくをうらむくなくむ風のきよふ

○秋ガキタコトハ風ノきサニカキノ蚕ガモウオツケヨチクナクデアカナアラウ

あひうつ

かくぐりつゆひ乃す挽おねる人まいくはししとふもをさるべき

○コレボドニあるものがコレニツタヌヲドウテツナイト思フニ居ラレツツラウ思ハ

人免ゆき後おあひ乃るきハバグつきさや思ひはるる

○人目ヲツムユエニコレカラ後ニモシをラフがまウナツタナラソソワケハシ

ラズニコチがツライノニナレデカナアラウ

くさふ 傍心通昭

ちりぬきバ後をうらむる花を思ひうらむるもやどめておは

○花ハチツテニハ後ニ芥ニツテニツテナテモナイ物チヤニソレヲエガテシ

セズニアウチサテモア花ニヨウフカチ

さうじ けうゆ記







イヌルガ け人間モテウドソニチモノデ 人ゴトニ死スバ皆カラダバ棺ノ  
中ヘトメテオケル カニジシノ玉レヒハ トコヘトニデイヌルヤラ ユクヘカレヌヤウニ  
ナツテニウノハサカナレイコヂヤ 子ノまゝらー

かそねぐさ

ふうやぬ

うむいぬねまふ何うハねぐさまむうつふいがかおも何うぬらうと

○冬タイトヨフ人ハ夏ニデモ足バ心ガ井ルト云コナレ 一夏ニスメバカリデド

ウレテ心ガ井ヤウゾ レヤウジニオテサヘニダラヌヤウニヨウビチヤモノヲ

さかりちけ

しゅうむこねらうしん

花乃いろくく一さうくくききききかへとくくききハそんり

○花ノ色ノ濃イノハタツタ一サカリデワツカろガカリナレソレヲ海ハ毎朝毎晩

ナニモノクサソルワイ タツタ一サカリナモノヲソノヤウニ染ズトモヨイコヲ

おぐくちけ

きんぎとる

おぐくちけハ決ちかそくちけくちあふさむぐくねるねりうつ

おけねるぬ 。おれえおぐくちけハ苦草  
うそくちけハ草草なり

いのちくちけをきくぬのむふくくちけバおまじけらふちけくちけのま

○世ヘニ虫ハ ちヲ令チヤトセウテねミニスレル ねミニナリニクイハカナイお

チヤニヨツテ 雞義ニセウテカナレサウニヨツ

かそくちけ

かぎのまね

さよふけしねくくちけゆくちさくちけ月さくちけを秋乃ちかち

○秋ガフチテモウ半分ホドモタニイコク月ヲ赤ク方ヘ吹カセ秋ノ山ノ風ヨ

ろくじ

きんせん法師

うみりーらむもそとんぬまねを成もさうろくじとねづきそん

○ワラ火ナラバ 煙モ立ッテモエルハズガヤニ 煙モタズモエルハニエヌモノ茶チヤ

モノヲ タレガワラ火ト云名ヲツケヌタノヤラ

ふね云。げんハ。ねのよきざ  
まおろくばげんハへまふらむ

さうまろむをせまバ きんせん法師

い。う。め。お。ま。つ。ま。あ。む。む。へ。あ。む。む。せ。を。バ。人。り。あ。つ。

○近イウチニ急イマセウトタガヒニ給ホヲヒテオイト ち日一テハ ツイワツ

カノるノ一ニ思ウテ待ッアヒダニサ 大が日救がタツタワイ コレデハドウ

アラウカ 急ウハハ心モトナイモノチヤ 急ハウト云ワレガ心アヒラバ人ニ

足ラレテア エトコチナノナラ給ホせ子バヨカツタニ

なり ねつえくこ

きん

あぢねあしおがきねつめさうんぬすおひひらみまばまてぬねう

○イロくサバぐノウイもニアフテキキ此身ヲエステモセズニ居ナガラ ソノ

ウイもノカズクヲトリアツタテナゲカウコデハナイ アムヤクナノチヤ

かろあろくつあそろあまてまねまろく日よめる

安信法師

信のきねくさくくあやふゆめハきねくくべやうくく海く

○アノ浪ノきノサカラカハツテハエルハ けち琴ノ調子モ ケサカラ

ハきノ個子ニナツテ キノフニテトハ改マツタカレラヌ

いづらき

かのみのおちき



何一もまはるべしききば白雲のいふをよとらるる時ちき

○山里ニ住テ居レバ じやうぢう雲ノ公ル時モナイ サウチウテサへ氣ノツマ

ツタ山ノ中ヂヤニ 何トセイト云フデハヤウニヤサハ晴ルトキモナイフゾ

かこ野  
しんみ

夏も秋も人々もあつたぬもあつたゆくのねきりぐわう那

○拙者が身ハテウド ウニハ夏ノ暑ガハイハエレダツテ アルヤナイヤラシレヌ

沼ありヤウチモノデ 世間ノ人ニモシラズ 立身モエセズバ テウド又ソノ沼あり

ノ流レテユク都ノナイヤウニ サテく心ノユカフカナ オモシロウナイフカナ

うつりたま  
源わどらぬ

秋くまで月あつたのみやハおるむり涙をくちくはるる涙

○ソウタイノ木ハ秋ハ実ガナル物ヂヤガ 月ノ中ナ桂ハ 秋ガキタトテ実ガナル

カ実ハナリハ甚ヌ 冬ノ秋ハ名ヨリサヤカナ光ヲ花ノヤウニ照ニヘチラスバカリ

ノイヂヤモノヲ ソレニ答ルデ秋ノ月ヲバカズツニ賞就スルハドウ云フゾイ

百和集  
よみ人あつた

花がらあつたぢちし、風の色はいくもづくがらしとらあつた

○花ト云花ヲバドレモカレモ皆 終リオホイニチラシテシウタヤツチハ風ヲバ

オレハドホドフソクニ思ウゾ タイテイフソクニ思ウフデハナイ

まきとなが  
まきとる

よまがらあつたぢちし、風の色はいくもづくがらしとらあつた

○よまの庭ノベツタリトフサガツテアル中ニ 五ツテイク道ガナイナラバ 秋

キタチガキカリハスイニ 鹿ノ中モ及ガアルテモハカハルテアラウ

おきこ火

みやこおしり

流きつづかしくおんしぬ海川 おきこむむらにや鹿ハキリしむ

○流レテ出ル源サドチギヤカシヌ海川ニバ マシテ底ノ源サハイカホドニカシ

レヌガ モシ沖ノ水イテ水ノチル時ガ多クナラ 底ノ源サモニエルテアラウカ

ちりまに

大い子里

のちまに乃おく流しおあるおへるまでいづかおあるぬいあまき

○後藤ノオクレテエタ苗デモ ムダニナツテニミイハセズニ 秋ハヤツハリ実ノ

ツテおミナル田ノ稻ヂヤトサ ヌ及ニテ居ル スレヤ学問デモナシデモ

オソガケヂヤト云テ為ミイヤウナイゾヤ ちりまのちの流儀ニシ

ちりまをいづか海をいづかしてあしたながめゆくをて時のち

よあそく人乃つひくまばよめる

偽心聖賢

ちりまのちりまあくやましくふゆまばんがらちりまぬづる

○ツン目ニ見アカト云ウテ 鹿ノタニトマテアル中ヲふテイケバ 鹿ニ目が

移ッテ コチノ心がサ 鹿トイツレヨニアチコチトチツテイクヤウチ心モチガスル

き後三のちりまをりる

# 後撰集抄

中山美石大人著

全二十冊

別記

全壹冊

後撰集古今集に同じく時代も古く歌も面白く優美なるを古今の任歌の十か  
あしぬをかくして中山美石翁に力をそめてかくし置せられ抄に於て出づれば後を  
別記を考へ古今未登の詠況も多しありて面白く初学の書としてよくその書を  
ゆへき書たり

# 冠位通考

石原正明選

全壹冊

皇國にて冠位を制せられ始位階を定む一事とも昔より沿革あり一事の毎年服色  
の考十八階三十階の階級冠位名義の源流を考へてその考へたりありてその考へは  
その考へを論じ別儀別制の異を一一とてその考へて置定せられしなり

# 江戸職人歌合

石原正明著

全二冊

中昔より東山院を合建條を合馬丸光産の歌合と職人其の歌合ありてあるにあたりて  
是の歌合ありて古今に記名同の職を記してその歌合を記し其の考へたり

